

アメリカ高等教育における舞踊の歴史：ウィスコンシン大学マディソン校を事例として

木場裕紀
東京大学大学院・大学院生
日本学術振興会特別研究員

1. はじめに

アメリカの高等教育機関においてダンスに関する学位を初めて付与するようになったのは、ウィスコンシン大学マディソン校である。同校の女性身体教育学部には1926年、Blanche TrillingとMargaret H' Doublerの尽力によりダンス専攻が設立された。当初は初等中等教育機関及び高等教育機関でダンスを教える教員を輩出することを主な目的としていたが、時代を経るに従って、様々な社会的要請を受け、そのビジョン、専攻体制を変化させてきた。本研究では同校におけるダンス・プログラムの歴史を、アメリカにおける芸術や高等教育を取り巻く環境の変化に着目しながら通史的に明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法

本研究では主にウィスコンシン大学マディソン校のアーカイブに所蔵されている資料を収集・分析した。その内容はダンス専攻で提供されていたカリキュラム、授業メモ、教授会の議事録、学生向けのパンフレット、歴任教員のオーラル・ヒストリーなどである。また近年のダンス専攻の変遷を調査するため、同校で教鞭をとる教職員に聞き取り調査（2015年9月）を実施した。

3. 考察

ウィスコンシン大学マディソン校ダンス・プログラムの歴史は、以下のように区分して捉えることができる。

第I期 1926-1945

女性身体教育学科に全米初となるダンス専攻が設置され、小中学校及び大学でのダンス教員を数多く輩出していった時期である。マーガレット・ドゥブラーのリーダーシップのもと、すべての人の創造性に資するものとしてのダンスを確立すべく、カリキュラム開発が行われた。一方でパフォーマンスにも力を入れ、学生によるパフォーマンス集団であるオーケシスを積極的に支援した他、ハンヤ・ホルムやハロルド・クロイツベルグなどの舞踊家も招聘した。

第II期 1945-1972

ハンヤ・ホルム舞踊団で活躍していたルイス・クロッパーを迎え、従来のダンス教育プログラムに加えて、プロフェッショナル志向のプログラムが開発・設置された時期である。1954年にドゥブラーが引退し、クロッパーとフィーがダンス部会

長に就任すると、学部レベルで上演・振付プログラムが設置された他、大学院レベルでも芸術学修士 (Master of Fine Arts) 学位が設置された。1960年代中頃から後半にかけては全米で学問としてのダンスの独立を模索する会議が相次いで開催され、それらに参加したクロッパーはダンス学科の独立を模索した。

第III期 1972-1988

ダンス教員の輩出という役割が見直され、芸術系学科としての独立が積極的に模索された時期である。1972年に男女教育機会均等法(タイトル IX)が成立したことを受け、ウィスコンシン大学マディソン校では1976年に、それまで男女に分かれていた身体教育学科が大学院レベルで統合される。これによりダンス専攻以外でダンスの授業を履修する学生の数は激減し、ダンス・プログラムでは芸術系学科としての独立を目指す動きが加速する。しかしながら、アメリカの経済不振のあおりを受けた大学財政の悪化と教職員間の不和が原因でプログラム縮減の対象となり、1988年には新規入学生の募集が停止される。

第IV期 1988-2015

ダンス・プログラムがそのアイデンティティを問い直し、芸術系プログラムとしての再出発を経て、ついに独立した学科としての地位を獲得した時期である。1990年にはインターアーツ・テクノロジー (IATECH) プログラムが開講し、先進的な取り組みとして注目を集める。1993年には新入生の入学を再開する。その後1997年には芸術学士 (Bachelor of Fine Arts) が設置された一方で、2001年からは75年の歴史を持つダンス教育プログラムが閉鎖される。2010年にはそれまで所属していたキネシオロジー学科から独立する。

4. 参考文献

- Gray, J. A. (1978) *To want to dance: a bibliography of Margaret H' Doubler*, doctoral thesis, the University of Arizona.
- Hagood, T. K. (2000) *History of Dance in American Higher Education: Dance and the American University*, New York: Edwin Mellen Pr.
- Hagood, T. K. and Kahlich, L. C. (2013) *Perspective on Contemporary Dance History: Revisiting Impulse, 1950-1970*, New York: Cambria Press.

※本研究は科研費 (15J04185) の助成を受けて行ったものである。

藤田明史

(関西学院大学大学院文学研究科)

フォーサイス(William Forsythe 1949-)が制作した『インプロヴィゼーション・テクノロジーズ(Improvisation Technologies)』(2000)は、即興によって動きを生み出すためのシンプルで実践的なテクニックが収録されている教育用のCD-ROMである。記譜とは異なり、映像という媒体を用いて舞踊における身体を正確に記録し再現できているという点において、このフォーサイスの作品は舞踊のアーカイヴとして、あるいは舞踊教育に大きな影響を与えた。

すでに松井¹や譲原²などのいくつかの論考のなかで示されている通り、フォーサイスの舞踊活動全般にみられる独自性はラバン(Rudolf von Laban, 1879-1958)との比較からも明らかになるように、作品ごとに变化する彼の振付法にある。しかし、この『インプロヴィゼーション・テクノロジーズ』内に広がる身体と言葉の関係に迫る考察は決して多いとは言えない。

本作品は、バレエの動きにフォーサイスなりの動きを取り入れ、再構築したものであり、インプロヴィゼーションの要素が含まれている。したがってフォーサイスは、この作品を通して舞踊家たちに舞踊を踊るための身体の生成の機会を与え、偶然生まれる即興の要素を重要視した。あくまで映像という媒体を用いたのは記号では表せない情報量を含んでいるからであり、決してフォーサイス自身の動きを模倣するように推奨しているわけではない。むしろ、フォーサイスが目指す舞踊は、一切の動きの意味を捨て去り、機械的に生み出される動きにある。そのため、言葉を最小限に抑えても、フォーサイスの伝えたいことは理解されたのである。

とはいえ、この作品には、フォーサイスの踊る姿だけではなく、言葉による身体の動きの説明がフォーサイス自身によって行われている。例えば、各映像内の動きを見ていくと、「線(line)」と「描く(writing)」に関するカテゴリーは、基礎的な動作の集合であるということがわかる。それはフォーサイスの説明でも、「手足」「肘」「膝」「腕の捻り」などの単語を用いて、身体の一部を動かすように指示することが多い。一方で、「再編成(reorganizing)」および「追加(addition)」のカテゴリーでは、基礎から発展した動きが含まれている。各カテゴリーの名前を挙げれば、「部屋の編成」「空間の回復」「空間的圧縮」「形容詞的修飾」「解剖学的な知識」など、およそ舞踊の動

き方を示しているとは思えないものが含まれている。またそれらを説明する言葉には抽象的なものも多い。しかしそれらの動きは紛れもなくフォーサイスの舞踊の構成要素の1つである。

以上のように、言葉を用いたフォーサイスの説明は、映像による動きのみでは本作品の情報の全てを伝えることができないということを表しているのではないだろうか。はたして言葉による説明は本作品にとってどのような意義をもつだろうか。

映像という場合、通常機械的手段によって再生可能な一つの複製メディアを思い浮かべるだろう。この機械的手段によって、記録できること、そして、それを再生したり複製したりできること、これらは現代メディアの重要な機能であることは間違いない。しかし、一般的に言って、映像は文字に比べ情報量が多く、多義的であり、一義的にその意味を決定することは困難を伴う。フォーサイスはこの多義的な映像に言葉を用いて動きの意味の生成を行う。

そこで本発表は、フォーサイスの『インプロヴィゼーション・テクノロジーズ』を、映像、言葉、身体という三点から分析し、それぞれの持つ意義について論じる。具体的には、下記の手順で考察を行う。まず、『インプロヴィゼーション・テクノロジーズ』に含まれるフォーサイスの身体と言葉を洗い出し、その関係性を導き出す。次に、異なる映像作品を比較対象として、その差異をあきらかにする。最後に、映像における身体と言葉の関係、記号学的視点から論じる。

身体の動きと言葉による説明がともに内在している点で、この『インプロヴィゼーション・テクノロジーズ』は独自性を持っている。本発表により、これまで映像記録として扱われることの多かったフォーサイスの本作品の新たな可能性を提示したい。

¹松井智子「フォーサイスとラバン——フォーサイスの『インプロヴィゼーション・テクノロジーズ』にみられるラバンの影響と独自の展開——」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第三分冊、早稲田大学大学院文学研究科、2012年、25-39頁。

²譲原晶子“The construction of classical dance vocabulary in the light of the principle of variation: a comparison with the compositional techniques of contemporary dance”『西洋比較演劇研究』12巻1号、西洋比較研究会、2013年、133-145頁。

ヒップホップダンスのステップにおける楽しさの表現—ニュージャックスイングに着目して—

小島理永¹⁾ 野村照夫²⁾ 来田宣幸²⁾
¹⁾大阪大学 ²⁾京都工芸繊維大学

1. 緒言

ストリートダンスの一つであるヒップホップダンスは、振りおよびられる各種ステップで構成するため、教授されたダンスの模倣で終わってしまう傾向が見受けられる。そのため、本研究では、モダンダンス¹⁾と同様にヒップホップダンスにおいても表現が可能であり、脚の運びによって行われると仮説を設定した。その仮説を検証するため、ニュージャックスイングに着目し、楽しさの有無による動作特徴量より、ヒップホップダンスの表現について検討することを目的とした。

2. 方法

1) 被験者

被験者は、ヒップホップダンス、ジャズダンス、よさこい、バレエ、創作ダンス等を経験している男女 10 名(平均舞踊歴 4.6±6.2 年)とした。

2) 実験動作および使用感情

被験者に 6 つステップで構成される一連のダンについて、楽しさの有無を表現しながら踊るよう依頼した。予備実験より被験者が 1 番感情を込めて踊れると支持があり、欠損値のないニュージャックスイングを分析の対象とした。

3) 実験環境

実験は室内(6.48m×6.78m)にて行い、被験者の身体には、反射マーカーを 15 カ所(両肩関節、両肘関節、両手関節、両大転子、上後腸骨棘、両膝関節外側、両足関節外果、両第 5 趾 MP 関節)に貼付した。また、撮影に際しては、6 台の光学式三次元動作分析装置(Vicon Motion Systems,100Hz)を設置し動作を撮影した。

4) 計測方法

撮影した画像は、プラットフォームソフトウェア(Vicon Nexus)を用いて 3 次元座標系を構築し、座標を原点として被験者からみて右側を x 軸の正の方向、正面を y 軸の正の方向、鉛直上向きを z 軸として、貼付した反射マーカーの座標を算出した。

5) 局面と変数の定義

ニュージャックスイングにおける両手関節間の距離の変化をもとに Event4 局面, Phase4 局面からなる 8 局面に分類した(Figure1)。

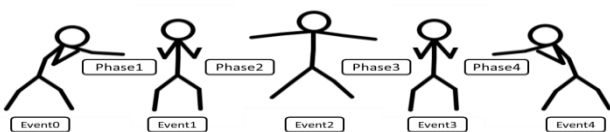


Figure 1. The movement of New Jack Swing

次に全身を左右の上肢と下肢、体幹に分類し、

全身の動作を示す説明変数として、時性を示す変数として速さをを用い 18 変数を設定した。また、空間性を示す変数として角度(11 変数)、高さ(1 変数)、距離(4 変数)からなる 16 変数を定義した。

3. 結果および考察

判別分析および動作特徴量の違いを求め、判別に貢献する代表的な関節部位と他の変数との相関を求めた結果、感情の有無による判別分析では、動作場面(Phase)にあたる 4 局面で 70%以上の判別がされた(Table1)。最も正判別率が高かった Phase2 において、感情の有無による動作特徴を明らかにした結果、両肩における高さ、左肩関節スピード、左肘関節スピード、左手関節スピード、左足関節スピード、右肩関節スピード、右肘関節スピードが、無感情より楽しい感情表現では、有意に速い値を示していた。また、上半身における前傾角度は有意に高い値を示しており、無感情より前傾していた。さらに、左肘関節スピードと左手関節スピードに最も高い相関が見られたことから、楽しさの表現の特徴には、両足ジャンプにより横移動時に伴う両手の開きが無感情より速く、特に左肘関節と左手首に関連があったといえる。

Table 1. Discriminant Analysis at Each Stage

Predictor variable	Eigenvalue	Canonical correlation coefficient	Wilks λ	Coefficient of discriminant function	Correct classification rate
Phase 1	0.91	0.69	0.52 **		70.0
SLWRI				1.22	
ALELB				-0.86	
Event 1	NS				
Phase 2	2.24	0.83	0.31 ***		90.0
SLELB				1.98	
DWRI				-2.97	
DKNE				1.75	
Event 2					
ALANK	0.27	0.46	0.79 *	1	70.0
Phase 3	1.07	0.72	0.48 **		85.0
SLHIP				1.03	
ARTHI				0.79	
Event 3	NS				
Phase 4					
SLANK	0.53	0.59	0.65 **	1	80.0
Event 4	NS				

*p < .05 **p < .01 ***p < .001

4. まとめ

ニュージャックスイングにおける楽しさの表現の特徴は、特に上肢によって行われており、無感情に比べて両足ジャンプによる横移動に伴う両手の開きが速く、特に左肘関節と左手首に関連があったことから仮説を一部否定するものであった。

【参考文献】

1)SawadaM, Suda K, Ishii M (2003). Expression of emotions in dance: Relation betweenarm movement characteristics and emotion. Percept. Mot. Skills. 97 : 697-708.

表現運動・ダンス授業における「恥ずかしさ」の言説に関する研究

柳原健二
(岡山大学大学院)

【研究背景】

学習指導要領におけるダンス領域の変遷をみていくと、平成元年の改訂で男女共修の制度が整い、平成10年の改訂で「現代的なリズムのダンス」が加わり、平成20年の改訂で男女必修化するなど、幾度も内容の改訂が行われてきた。この流れの中で、表現・ダンスは体育の他の領域と比べるとその指導の困難さが繰り返し指摘されてきており(宮川ら, 2005)、特に学習者が感じる「恥ずかしさ」はダンス指導の阻害因として長年注目されてきた。松本ら(2013)は、子どもの「恥ずかしさ」はダンスをする際に最初に乗り越えるべき問題と述べている。

これまで、表現運動やダンス授業における「恥ずかしさ」は「先ず恥ずかしさを無くさせることが、指導者にとって重要な課題である」(森川, 2014)など、払拭すべき感情として当然のことと語られてきた。しかし、そもそも表現運動・ダンス授業における「恥ずかしさ」について掘り下げ、「恥ずかしさ」の内容を明らかにすることを主目的とした学術的な研究は限定されている。数少ない先行研究としては、麻生(1988)や酒向(2014)があり、それらは大学生や教員を対象に意識調査を行なっている¹。しかし、もしも「恥ずかしさ」が表現運動・ダンス授業の阻害因であるならば、さらに多角的で、掘り下げた議論がなされるべきである。

「恥ずかしさ」を考える上で参考になるのが、感情心理学の領域で積み上げられてきた「恥ずかしさ(羞恥)」に関する知見である。羞恥研究の歴史は長く、作田(1967)をはじめ、成田ら(1990)、菅原(1992)、樋口(2000)など様々な人が研究を行なっている。特に、近年では、樋口(2012)によって羞恥のメカニズムが研究されており、羞恥が発生する状況によって、発生因が異なることが示されている。

本研究では、<「恥ずかしさ」と表現・ダンス授業>を重要なテーマと捉えた上で、その研究の第一段階として、表現運動・ダンス授業における「恥ずかしさ」に関する言説の分析を行なうこととした。近年の感情心理学の「恥ずかしさ(羞恥)」に関する知見を援用しつつ、経時的な視点から表現運動・ダンス授業の枠組みの中で「恥ずかしさ」がどのように語られてきたのかについての分析を行なうことを目的とする。

【分析対象・分析方法】

本研究では、雑誌『女子体育(子供と女子の体育)』(1959~2015)を分析対象として用いた。体育専門雑誌を対象とした理由は、研究者だけではなく学校教育に携わっている先生など様々な人が著しているため、言説の変容を読み解くために適していると考えられる。分析方法として、以下の2つを行なった。

<計量的分析>

樋口(2000)が分類した恥の下位感情²を参考に、『女子体育』に掲載された表現運動やダンス授業に関する記事を収集し、恥の下位感情に関連する部分を抜き出し、計量的に分析を行なった。

<テキストマイニング>

計量的分析と同様の方法で記事をコピーし、恥の下位感情が関連する文全体をKH coder2.00にデータとして入力しテキストマイニングを行なった。

【結果】

「恥ずかしさ」に関する言説を年代別・発生状況別³にみたところ、どの年代においても公恥状況が他の状況より多い傾向がみられた。樋口(2002)は、公恥状況における恥の発生には「自尊心低減」が大きく関わっていると示している。このことから、表現運動やダンス授業において「自尊心低減」が恥の発生に関与している可能性が考えられる。

言説の推移を計量的にみた結果、「恥ずかしさ」に関する言説は、1970年代から逡増し、1990年代前半にピークをむかえ、それ以降は漸減している。この言説の量的変容の理由には、男女共修授業という制度的な変革が関与していると考えられる。一方で、性的状況に関する言説の量的変容はみられなかった。

さらに、KH coderを用いて共起ネットワーク分析を行なった結果、1990年代では、「動き」、「分らない」、「恥ずかしい」の間に共起関係がみられた。このことから、子どもにイメージを明確にもたせることが、「恥ずかしさ」を低減させるために重要である可能性が示唆された。

¹学会発表においては、梅沢(1973)が大学生を対象に意識調査を行なったり、田上(2014)が小・中学生を対象に発達段階別の恥ずかしさの相違を調査したりと研究が行われているものの「恥ずかしさ」を主目的とした学術研究は数少ない。

²恥の下位感情は、混乱的恐怖、自己否定感、基本的恥、自責的萎縮感、いたたまれなさ、はにかみの6つに分類されている。

³樋口(2000)は、典型的状況として、公恥状況、私恥状況に、非典型的状況として、対人緊張状況、照れ状況、対人困惑状況、性的状況の6つに分類している。

ダンス必修化による中学校の授業の実態 —創作ダンスと現代的なリズムのダンスに着目して—

鈴木純（筑波大学大学院）
村田芳子（筑波大学）

【背景・目的】

平成 20 年告示の学習指導要領において、中学校 1・2 学年でダンス必修化となり、平成 24 年度より完全実施となった。ダンス必修化の本来の意図としては、学校体育実技指導資料第 9 集「表現運動系及びダンス指導の手引」にも示してある通り、「創作ダンス」「フォークダンス」「現代的なリズムのダンス」の 3 つのダンスを中学校 1・2 学年でバランスよく学ばせることとされている。しかしその一方で、メディアの偏った報道や社会でのダンスのイメージ等から 3 つのダンスの実施率にかなり偏りが生まれてきている。さらに、「現代的なリズムのダンス」は自由なダンスとされているながらも、既成の動きの習得学習を取り入れている学校も少なくなく、3 つのダンスの特性やねらいが十分理解されていないまま実施されている可能性が高いのではないかと推察することができる。

そこで本研究では、中学校のダンス必修化に対応した授業の充実に向けて、全国規模の中学校を対象としたダンスの実施状況や具体的な授業内容、教師の意識等に関する調査を通して、創作ダンスと現代的なリズムのダンスを中心に授業の実態を明らかにするとともに、今後の課題と方向性を見出すことを目的とする。

【調査方法】

①調査対象・調査時期

本調査は、表 1 に示す全国規模の中学校（6 県、9 市）を対象とし、平成 26 年度 7 月～27 年度 5 月に調査を行った。市においては市教委を通して調査を行い、県においては、県教委が主催する講習会にて調査を行った。回答数は合計 654 校であった。

表 1：対象地域・調査時期・回答数

No.	対象地域	回答校数
1	札幌市	92 校
2	仙台市	73 校
3	茨城県、つくば市	36 校
4	静岡市	43 校
5	神戸市	78 校
6	岡山県、岡山市、倉敷市	91 校
7	徳島県	65 校
8	広島県、広島市	55 校
9	福岡県、北九州市	73 校
10	長崎県	48 校
	合計	654 校

②調査内容

「ダンス領域の必修化に対応した指導の実施状況と工夫改善の検討」（文部科学省委託研究，村田芳子）の調査内容をもとに、本研究では特に「ダ

ンス領域の実施率」、「3 つのダンスの実施率」、「取り上げた具体的な授業内容」、「学ばせたいダンス」に焦点を当てた。

③分析方法

選択肢回答は Exele を用いた単純集計，自由記述はテキストマイニング分析を用いた。

【結果・考察】

①ダンス領域の実施率

全対象地域の「ダンス領域の実施率」は 98.2%（642 校）と非常に高く、（中村，2009）と（板倉，2011）の結果と比較しても、実施率は年々伸びてきているといえる。

②3 つのダンスの実施率

「現代的なリズムのダンス」が 76.1%（491 校），「創作ダンス」が 54.4%（351 校），「フォークダンス」が 42.0%（271 校），その他が 6.7%（43 校）という結果であり、「現代的なリズムのダンス」の実施率が圧倒的に高いという結果であった。また、3 つのダンスの実施率は、地域によってかなりの差がみられたことから、各地域での取り組みが関与しているのではないかと推察される。

③取り上げた具体的な授業内容

「創作ダンス」では、「グループ作品創作」が 54.3%（210 校），「様々なテーマや題材からの即興表現」の中の「日常動作やスポーツ」が 41.1%（159 校），「群の動き」が 30.7%（119 校）等の回答が多かった。「現代的なリズムのダンス」では、「ビデオ等から振り付けを真似させる」が 52.8%（273 校），「オリジナルダンスを創る」が 50.1%（259 校），「音楽から自由に踊る」が 33.7%（174 校）であり、「現代的なリズムのダンス」は、学習指導要領や指導資料において自由なダンスとして示されているながらも、ビデオ等から振り付けを真似させている学校が半数以上に及ぶ結果となった。また、ロック・サンバ・ヒップホップ等のリズムの違いを理解していないのではないかと推測される回答が目立った。

④教師が学ばせたいダンス

「現代的なリズムのダンス」が 50.1%（307 校），「創作ダンス」が 41.8%（256 校），「フォークダンス」が 18.6%（114 校）という結果であり、3 つのダンス実施率に比べて、「現代的なリズムのダンス」と「創作ダンス」の差は小さく、「フォークダンス」が極端に低い結果となった。このことから、実施されている 3 つのダンスは、教師が本来学ばせたいと思うダンスと異なっているということが明らかとなった。

ダンス完全必修化から 3 年目に入り、実施率においては確実に成果がみられる。しかし、今後は必修化が本来意図する 3 つのダンスをバランスよく学ばせることと、具体的な授業内容のより一層の充実が求められる。

創作ダンスの授業における否定的イメージを持つ生徒の変容

村上恭子(愛知東邦大学 人間学部 人間健康学科)

1. 研究目的

本実践研究は、創作ダンスの授業当初、創作ダンスに否定的イメージを持っていた生徒の身体認識の変容から、「教材づくり」¹の成立に必要とされることを考察した。

2. 本実践研究の方法

2-1 研究期間

2010年11月9日～2011年1月11日(計12時間)。

2-2 研究対象

授業者=研究者が担当したC高校2年生女子28名のうち、授業当初、創作ダンスに否定的イメージを持っていた生徒1名(以下A子とする)。

2-3 研究手続き

- (1) 創作ダンスの事前調査として、生徒に中学校の既習内容を記述させたところ、否定的な記述をしていたのはA子ひとりであったため、A子を今回の調査対象者とした。
- (2) 授業中に一点固定式でビデオ録画を行った。
- (3) 毎授業、ビデオ撮影した授業記録をもとに、振り返り用紙を用いて生徒に省察をさせた。
- (4) A子の変容の分析方法は、生徒28名の事前調査の記述内容から9つのカテゴリを作成して、A子の感想文を分析した。なお、カテゴリの作成手順は、次の方法で行った。
 - ①生徒全ての感想文を一文で切片化した。
 - ②1つの単語の回答も一文とした。
 - ③指示語は、授業者=研究者が文脈で判断した。
 - ④分類した記述内容に通し番号をつけた。
 - ⑤これらをカードにし、教育学専攻の大学院生2名が独立してKJ法で分類した。
 - ⑥同大学院生2名が相談して、9つのカテゴリ(難しさ、協力、自主性、楽しさ、教員、非協力、テーマ、学んだ内容、その他)とした。

2-4 創作ダンス12時間の単元構成

創作ダンスのテーマは、北海道修学旅行を取り上げ、単元は4部構成とした。1部は、単元全体の導入を行った。2部は、創作ダンスの課題学習を学習させた。3部は、修学旅行のグループ(7～8名)で小作品を創らせ、クラス全体の群の作品に繋いで、連作仕立ての作品とした。4部は、発表会に向けて鑑賞一評価一省察をした。

3. 結果と考察

授業1回目から11回目のうち、変容が顕著な2回目、4回目、6回目、8回目に着目した。

授業2回目、A子はペア活動に参加できず立ち尽くしたり、群の中心にいることの抵抗感から下を向いたりしていた。感想文では4文中4文が「非

協力」であり、A子は自己を見つめて否定的に捉えていたと判断した。授業4回目、「集まる一飛び散る」の課題学習で、A子は飛び散った後、近くにいたB子の手招きに応じて走って行った。A子は発表後のビデオ録画を見て、自分の動きとテーマの不一致を感じ、感想文では8文中5文が「非協力」、2文が「難しさ」、1文が「学んだ内容」「その他」と記述した。ビデオ視聴を用いたメタ認知の視点により、A子は踊る仲間や作品に僅かに繋がりをもち始めたようにみられた。授業6回目、A子はダンスの動きに積極的に関わっていた。感想文でも、「協力」、「自主性」、「楽しかった」、「非協力」が各1文であった。これは、A子のグループのメンバーが修学旅行と同一のため、楽しかった過去の追体験ができ、A子は夢中になれる自分を発見できたと考えられた。授業8回目、鑑賞者を前にした中間発表会であった。A子はグループの一員として作品をまとめ、踊り手の一人として舞台に立った。感想文では「楽しかった」が2文、「自主性」が1文であった。A子は鑑賞者という他者のまなざしと拍手を受け、素直に「嬉しかった」といえる自分を発見したと考えられた。

以上、A子の感想文は、回を追う毎に「非協力」が減少し、「自主性」、「学んだ内容」、「楽しかった」、「協力」へと肯定的な記述に変容した。A子は当初、創作ダンスに否定的イメージを抱いていたが、メタ認知の視点や他者の視点を持ったことにより、身体認識の変容がもたらされたと考えられた。

4. 結論

創作ダンスに否定的イメージを持っていた生徒の身体認識の変容から、「教材づくり」の成立に必要とされることとして、次の3点の示唆を得た。

(1) 授業者=研究者に必要とされること

- ①否定的イメージを持っている個を大切にすると指導を行う。
- ②過去の楽しい共通体験から、心を開かせる教材を用いる。
- ③「他者の視点」を持たせる場面設定を行う。

(2) 生徒に必要とされること

創作ダンスのイメージや課題への疑問を、授業者=研究者(教師)や仲間に素直に伝える。

(3) 授業者=研究者と生徒に必要とされること

両者が作品のイメージを共有して、鑑賞者という他者の視点やメタ認知の視点を持つ。

(付記: 事例の公表に当たっては、本人と保護者の了解を得ている。)

註1: 本稿の「教材づくり」とは、アクション・リサーチの理論に依拠し、授業者=研究者(教師)と生徒によって成立するもの、という立場をとる。

参考文献: 全国ダンス・表現運動授業研究会『明日からトライ! ダンスの授業』大修館書店、2011年。